

福
刀筆青砥石文
壹

~ 13
3573
1



門 13
號 3513
卷 1

大學圖書館
34.6.3
藏書

つらや



有砥石文鸞水箴語叙



譚風月後記二書並行于世客歲又翻案
唐山小說歡喜冤家而寫以國字其書三
卷其文艷麗而異語多矣遙投諸余見求
斤削余素不好為人師况小說乎且齡過
半生憾挈瓶屢空鳥為人畫蛇足之為哉

將固辭言未自宣。書肆平林堂知之亦請
疾余之筆。削刊其書。自是之後。誅求交造
一則為名。一則為利。於余何與焉。然彼此
往來稍久。義不可辭。今茲臯月。淫雨垂三
旬。四鄰寂寥。茅屋無客。余于時有小恙。
日仰臥讀彼書。讀了復思之。作者意匠雖
佳。猥褻亦甚矣。其所相求。噫有故哉。遂拂

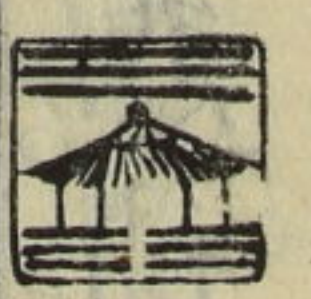
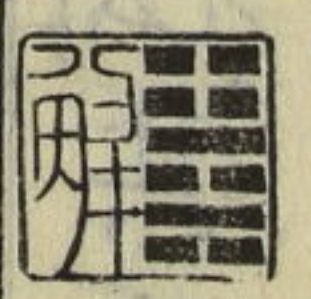
案抽毫。叨編削磨。研而祛其醜態。補之以
勸懲。綴之以俚語。因故增稿者三卷。今以
六卷為全本。兩三月而淨書方成。迺命曰
鸞水箴語。鸞鳳族也。詩人詠為山鷄。其意
本此文。則雖就於余之筆。事則出于彼之
意。此非可署吾名。號者而書。肆露之又以
其結局。與摸稜案相似。私重書名。曰青砥

青砥石文卷之

石文云若夫以櫟亭之才猶且欲借玉工之手令倍其價書肆唯取名耳固守株而不移依砥礪以為獲玉兔可謂謬矣刻成之日爰記編削顛末以代序

文政三年庚辰陽月

飯台因曲亭主人撰



新刻刀筆青砥石文鸞水箴語總目錄

第一套 花妻はなつま夜嵐よあらし 時豪ときたか乃朝霜あさのしも

第二套 藤白ふじしろの春庭はるのには 洛陽らくやうの倚居よがせま

第三套 鴨河鴨川乃涼床せむせど 清水しみず乃遺扇よせあふ

第四套 妾めかけの初見はつけん参まゐ 鑿うごの鹿嶋かしま立た

第五套 慾参よくまゐ乃衣半ころも 夏虫あつむし乃封翰ふうかん





針箱
 の
 花
 窠
 笠
 隱
 居

さ
 ら
 ざ
 二
 郎
 草
 樂
 偽

阿
 磔



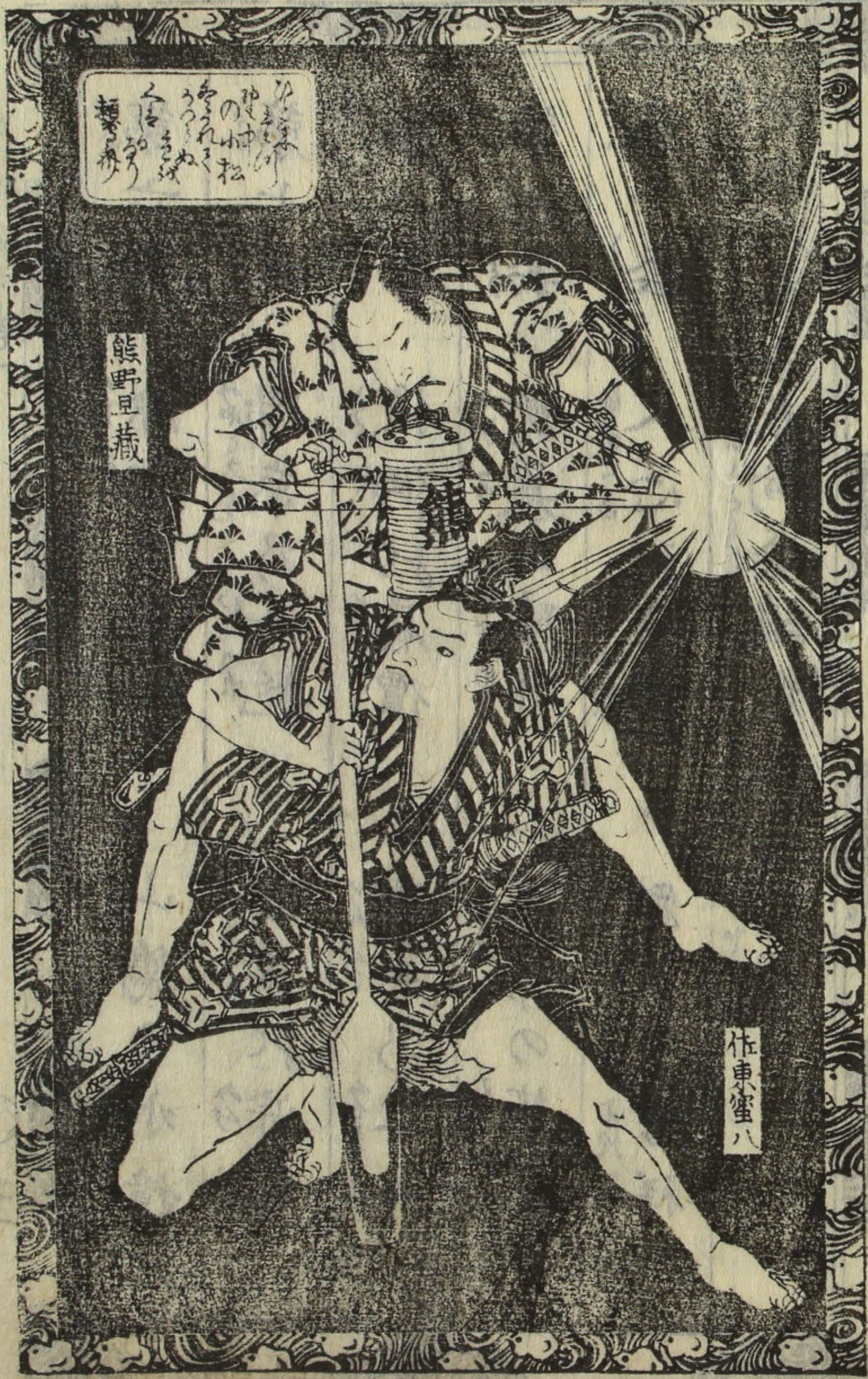
圓
 鼠
 食
 穢
 憎
 清

玄
 同
 居士

さ
 くら
 き
 へ
 佐
 栗
 父
 平

異
 森

音
 石
 丈
 卷
 一



第六套 除雷の垂恟 山鷄の水鏡

第七套 歸京乃音耗 假梁此涼響

第八套 伎倆此履價 因果乃車井

第九套 新墓の陷窳 奈芋の隻繫

第十套 人心此追儼 叙人乃吉祥

全本六卷每卷兩套編削總目錄畢

刀筆青砥石文鸞水箴語卷之一

江隱 曲亭主人筆削

洛客 櫟亭琴魚原稿

第一套 花妻の夜嵐 時豪の朝霜

いづめの鏡の池よ山鷄乃影小愛つ色小溺るわかく詠出せ一歌ハ是此の
草紙の大意よて張華が博物志小摠もるわろ足引の山鷄ハその美毛に
愛て水小映と終日得去心惚目眩とて竟小溺死ると之男女の
相歡ひて彼臭骸を抱きて得去とて家と亡し身と喪ふ亦これと同一
かへ色ハ影也慾ハ水也泡沫無常と悟らとて影小迷ハ愚あはばや

且説新熊る鎌倉の鐵觀音堂の雪下のほろにあり。又新清水の觀音に唱ふ。
 此れ是鐵像あれども口大なる首の三年。軀の崩たりを俱に窟堂に安措。
 今ハ瑣々やめ、室内小わり。蚤が子牧童をこゝの首觀音と唱り、のこれ抑
 この佛像の當初は井と掘り、土中より出たり。よそその井を鐵井といふ。
 鎌倉十井の一個。又説鎌倉將軍賴朝卿の時北條時賴朝臣執權とて
 青砥藤綱と寵用。四海のく無事ありける。建長元年丁酉の冬十一月十日
 わまれば事とよ。三更月頃きて霜天は滿七郷夜静きて人迹絶り。かき拵り
 一個の男子。いづく慌る面色まで。は女子の手を掖り、件の鐵觀音堂のほと
 近く走り来たり。男子は廿四五歳。人色白く、月額青く、黒衣赤帶にて

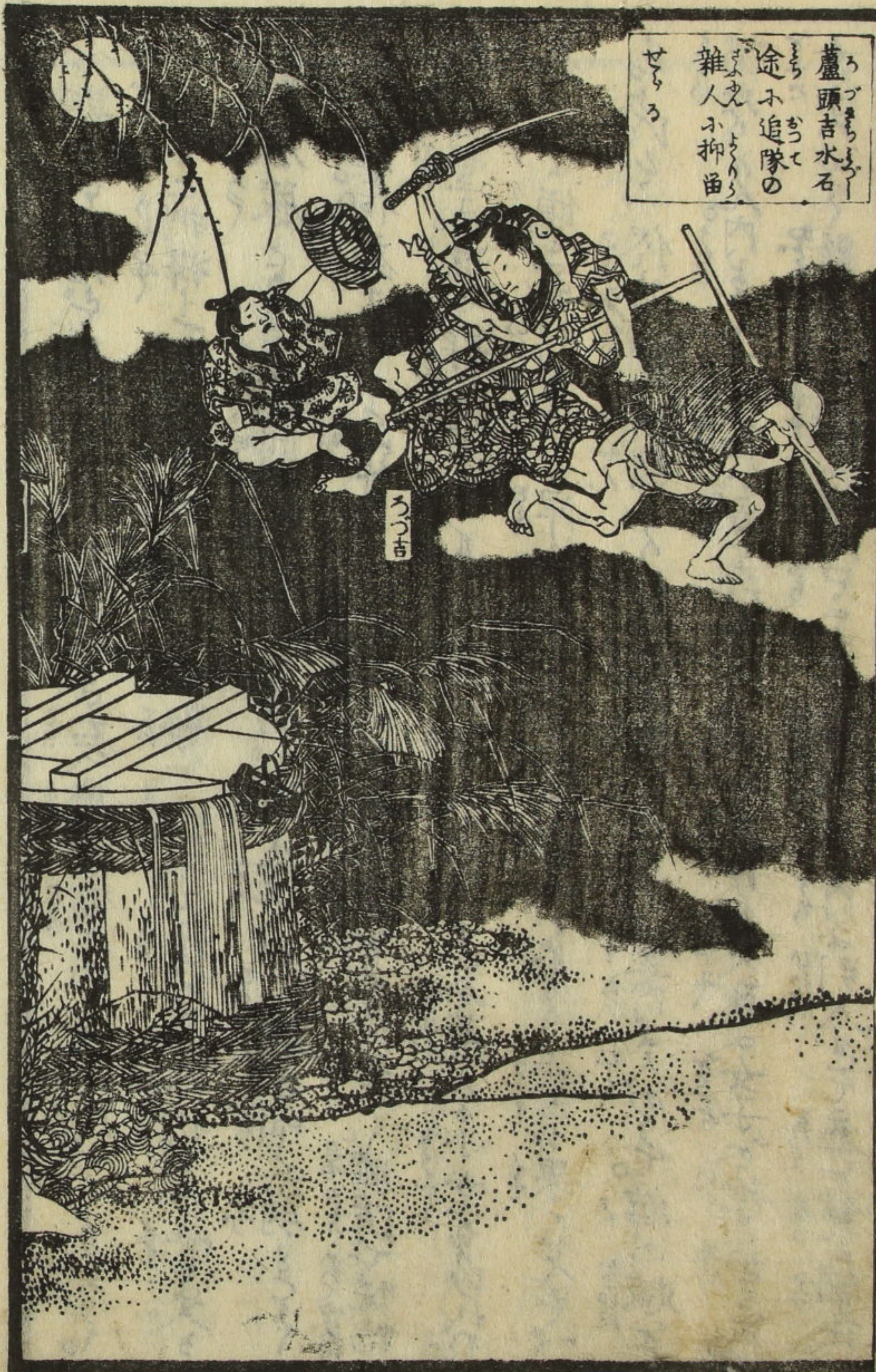
黄ある糸鞆の腋刀を挿し。女子は十八九歳あり。顔ハ暮春の花のごとく。
 靨いと濃あり。膚ハ仲秋の月より似て玉も欺くべし。目ハ溢り秋波も憂を
 含め、海棠の雨と帯る風情あり。腰ハ純り、副紅ハ風小惱る青柳ハ尾を垂り
 鳥ハ彷彿と。縫箔摺箔いづくも綾の袿。緋の纈の衣、真白の衣、三放四襲る。
 金襴の帯の端地を曳き、小解んとする。紙結びもわらわと棲り。踢ひく裳
 取次氣まじかくてこの男女ハ齊一吻と息をつぎ。後方遙小兒うり。女子ハ
 涙をくく。將場の野鷄の羽を傷ま。ややく脱き来つとも。復も追勝の
 蒐りやせん。とてもかくても添遂む。その御堂を死所と契り、ハ虚言歎
 いハ甲斐るや。と怨む。男子ハ背を搔拵て。その人とも覺期ハき。只

共侶あつと逝水の中と堰きて形あり恨し世ふとえんより。死天の旅宿の遠も。
 安樂國と聞かば冥土も後安なる外ありぬ夜嵐は散る可憐花ながら。
 他の眺は遺るに媚しよとて草と折布てついで俱は合掌し観音堂をぬかむ。
 念仏十遍を唱へてあつと女を殺さんとて刃を抜んとする程は追隊の雜人簇々と。
 東西より走り来つ月と燭は透し見て彼處よりと罵動揺ゆれ手少く
 棒と取る得て打倒さんとて競うて蒐く。男子は信とえかたりて再び追隊近づ
 たり。殺拵へどて死を急ぐ。寂期の本意を遂かそうづ。要時彼法堂のまきに
 隠ましく俟ねと引立て女子を後方は推遣う。刃と見ると抜閃うて身勢を敵手の
 死物狂い面もゆるげ進を逆へ彼打仆せと叫ぶの。雜人の事ありあれば刀小怖とく

合期せども思ひも殺立れて左へ靡き右へ靡き曲るの。とて近づくの。
 只置々と捫擇して武藝は疎き一個の敵と拉いと得る。刀折る雲も入る
 月の朦朧とる。障は同士撃をとりてれば遠は堪へど一碎小咄と崩れとく
 逃走ると何處までりと追うる。女子はかる光景をんに危く。騰消て慌忙
 観音堂は身を躲さんとまつ。夜守人ゆりたすふ荒る。小堂ありけは。
 扉斜に傾き引ともく早め開き。こゝろふせんとむり小困り果て見とべ
 志とる。其れは惘然とる。浩如し思ひひき。堂内より入りて。緋の趣を
 認たりん内よりと片扉を密とひらつ。声もかけど矢度女子を抱き留ま
 女子はいつ駿と吐嗟と叫ぶ。口より手を掩理り内より引入して。扉を楚と闔るに

青砥石文卷一

七



蘆頭吉水石
 途不追隊の
 雑人小柳田
 せりろ

青砥石文巻一



〇

ろん女子の頻りよ叫べども既ふり情郎の仇を追は走らぬ。時又諺来て
 放すくもやざんハ侶は離き由面の雁のや鷹鳥捉ま如く組伏せしとく
 今さらんせんやあつけん音あくむり声せらぬ且て件の女子ハ解れ
 帯を引ながら物別れを走り出只喃々と咳き手をも帯と締り折る。一個の
 老人追蒐来てその水石をわらわやと呼びひれて。多々さま故面目を。とむるに
 逃んとする疾走り懸りて。帯の所結引留め狼狽物奴親とを逃る。追隊は挿れ
 ぞく来よと引立て足は信して將て邁ぬ。當下件の堂内より一個の男子頭を出て
 遺憾げ小目送る。その人の年紀骨相廿四の仕伎の瘦穴ふく色白く月額の
 迹五不許延黒とて天鷲絨に似たり。身は皂と蛇拷の衣の下晡たる。状

一領被て片手巻ある鞆糸の垢は光りと斑は断る。両刀を腰はとられは是
 武士の浪人あふ。かくてこの仕伎の手よむる簪と月は翳してとんからん。つ。こ
 彼女子が堂内は遺せ火拾るあん頻は獨點頭の。思ひ捨がして下
 迹と跟んと進む程は蕉火をぬり照して人夥来りれば。原来再度の追隊
 来るべ。喧嘩の側杖打き下と。やも途を横ぎりて藤澤のかと走り。ら
 する程は己前の男子ハ勢ひ小任り。只管小追撃して五六町走り。追隊の
 中は一兩人こそ得るもの。あつて忽地は声と激し。逢さ入々の跳足る。三面六臂
 ありあもゆぬ敵の僅一人あに逃る疾手柄よるところ足場はよれど共侶は
 取て返して打仕きた。頻は罵り辱むれば。衆皆こは獎されて齊一足を立

る月。咄と嘯て打閃く。棒ハ冬野の枯尾花の風まききより。鯨が勢ひ
當りかければ。男子の思ひを長途せ。後悔する立ても形く。透を窺ひ逃んと
する。取籠て撲程。遂に刃をうち落さん腕を折れ。頬を打傷られ滾々と
去て流る。鮮血ハ蘇枋の陶を傾る。忽地ハ仰返て半死半生のけり。と
奔々と縛めて又蕉火をゆり照し。生虜と牽立て衆皆観音堂の邊にまつ。
復彼女子と捕入ると堂内堂外に。樹と敲き。草を拂ひ。と。八方遺る。あ
部して未獲とも。その往方もある。よ。け。又只男子を刺し。擡りて女子の
所在を責問。痛手の苦惱堪ざらん。果敢々々。得答と只観音堂
観音堂と。む。り。と。定。ら。る。程。は。鶏。鳴。曉。と。告。る。衆。皆。一。如。し。

うち聚つ。まづ。主人。ふ。由。を。告。て。再。び。女。子。を。索。ん。と。て。件。の。男。子。を。追。立。せ。
辻町のか。還。ら。る。抑。こ。の。二。條。の。情。由。を。詳。ふ。る。小。彼。淫。婦。ハ。水。石。を。啜。り。鐘。倉
米町の破落戸。佐栗。灸。平。が。女。見。る。と。湯。治。と。い。ふ。の。懸。想。一。つ。夥。の。金。を。費。して。
ら。る。比。娶。り。と。女。田。樂。の。鼓。拍。蘆。頭。吉。と。い。ふ。浪。子。ハ。水。石。奸。夫。と。り。け。し。今。宵
竊。出。せ。也。只。彼。水。石。と。姦。淫。せ。観。音。堂。の。浪。人。の。と。ま。あ。い。ま。ご。定。不。聞。え。
水石が。蓋。て。秘。し。ん。べ。ご。の。時。鐘。倉。の。辻。町。ハ。嶋。影。屋。湯。治。と。い。ふ。と。富。饒。る。町。人
あり。渠。ハ。紀。伊。國。海。部。郡。藤。白。山。今。藤。代。の。獲。る。醫。師。某。甲。が。家。子。ふ。て。本。姓。
名。草。氏。あり。と。か。舊。里。ハ。劇。齋。と。い。ふ。弟。只。一。人。あり。湯。治。ハ。醫。師。の。子。と。い。ふ。
とも。是。採。る。と。を。嫌。ひ。二。親。身。あ。り。比。家。督。と。弟。劇。齋。は。讓。與。へ。た。れ。ハ

...

...

その換中とて親の遺財を残り。懐中へ京小出て熊野人參を賣りて小
 一年の病煩ふて辛く本復たつまでも遂は本錢を喪て世に便著なく
 ありけし。舊里ある身小金五兩借んとて藤白へ消息せし。劇齋つやく承引
 これの縁は二十石の莊園を譲られの。亡親の遺金八和君が搦獲りて出
 ぬひふ。そ須用盡せとて進らざる錢の。下や恥を志さざる人おとと辱めつ
 回報して京の飛脚を返しけし。湯治の恨憤を安らぐべし。勢ひ争ひ
 かこれに。俄頃京ある家を毀て鎌倉へ赴き。雪下の辺ある裏借屋に膝を
 容きて幽る世を渡る程。そが鄰は見立千賀右衛門といふ浪人あり。妻を
 近屬身より。盲目なる女見一人あり。その名を浴堂と呼びて今茲廿歳は

多かり。こへ彼此ある少女亦。筑紫琴を教るもの。さる生活る似と。一個乃
 下女を使ふまは。貪りかたをええし。ける。然る親千賀右衛門。素より此の
 貯禄あり。高利の小金を貸出。その利子月々不入。かてその次の年此夏の
 比千賀右衛門の時疫を病臥せし。旬小餘き。湯治の合壁の事。れば拾
 か。朝夕の安否を問慰め。且折々の夜仰て湯液を勧め。せ。親子を
 聊慰め。いと憑く。とある。有。夕千賀右衛門の病些間あり。折々湯治の着病
 と。その甲夜より来。けし。千賀右衛門の。怪は枕辺に召近つけて。密に
 せ。其齡六トは。天病。頭をぬれば。瘡。くも。わ。い。ふ。せ。男見
 り。又。さ。る。親。族。り。か。つ。ら。の。後。ま。も。心。は。か。ら。浴。當。か。る。の。と。渠。八。年。三。才。の

と死痘瘡の餘毒おとろく。兩眼失う。僅に琴を操持して少女を聚合する。親
 ろかりて今の如く世とてると難く。な有財四五千金あり。又貸出せし金
 七八十兩あり。又年を歴て返らざる。手實數十通あり。これと和殿は譲ふ。願ふ
 浴當と妻中て。その替女多々。憐れむ。歡ひこれなまんとせり。和殿の心のまやと
 他夏もく相譚へ。湯治の聞て。一議ふ及ぶ。仰うけのつひぬ。某の紀の山家ふ
 生とて。曩ふ都は出れども。趣舎あつて。本錢と喪ひ去。歳よりこの地は流し来つ。
 辛くその目を送る。絶て助る友なり。る人かましく。あつて。令弱を妻して。
 金夥。附屬人と宣さる。と推辞んや。る大恩を稟る。の誰う他は。あつて。心せられ
 浴當との生涯見捨ゆ。と誓ふ。如く承引せ。千賀重門。歡びて。聽て。女見を

呼して。云々と告ぐ。浴當も亦歡び。るもかものと應たり。かくてその次の具
 黄道吉日なり。けし。湯治浴當は婚姻の盃。その形む。り。結して。近辺は
 婿の披露つ。貸する金の手實書改る。ど。その夜千賀重門の
 身まろりけり。その中陰果。比湯治の間の壁を抜。て。此彼家作をひら。ち。或
 その金を貸出。或千賀重門が貸する金を。債する。の奇鋭。ふ。時運。や。稱
 けん。曩ふ。捨物。せ。舊手實。中。忽地。は。埒。あ。て。僅一年。む。の程。は。有財
 四五百兩。あり。ぬ。そ。況。且。中。遊。せ。千賀重門。が。時。より。も。利子。を。重。て。貸。出。せ。る。
 兩三年。中。七。千金。は。及。べ。り。これ。より。辻町。は。敷地。廣。き。家庫。を。贖。得。て。移。徙。して。い。く
 福。の。奴婢。八九人。を。使。ひ。つ。い。と。花。々。々。々。栄。々。る。ん。湯治。の。多。ひ。の。隨。は。富。ハ。驕。む

甚くして早晚恩を忘る義は背き女房浴當が贅女をぞいと朽やく臆
 び下して疎むるのつれなく只強面の管待してさる失ふぬるを甚く
 責罵の刺奴婢に分けて日三たびの食膳も果敢なく箸をとせんと
 身へ美酒嘉穀をのち契へも飽むと近ごろふ妾宅を構せり其処は
 かひなく浴當の怨むと妬むとも身贅者のかまへ争ふも
 勝るると心の屈して氣は患の憤りのあまら書背は癰疽ひ来て病に
 百日許竟もむきくかりにたりその死にせし時ひとくはれる声を震し今
 この家の富饒もふまふ親の呪もふまふ身ひつを疎果てかくもむむ
 せ恨みたるの心なるその金のわん限り崇むやと罵りたり湯治のれを物

ともせむ妻もむむりて程あり彼外妻を引入ると居ると二ヶ月むりあり
 その妻も頓死してたりこの前妻の祟るとも知る人もあらずその時湯治は
 る身名草劇齋はその醫療行はば賸兩年の早損水損を干石の莊園も大く
 皆無ありけし困窮はく是又逼るといふ兄の鎌倉を發せしむの趣
 紀の藤白へ聞へる些の金を借ん為湯治許消息なり當下湯治の劇齋が
 未状と讀も果さずうち腹をく撲地と擲これ親の家子あるも家奴目を
 弟は譲りしよ這奴足ると疾走する飲る白物は貸銭ありと罵るめつ回報も
 せどその飛脚を返さずある件の飛脚の日ごろ経て藤白へ取著る湯治が家の
 富饒あるその緯の為体且そのつと疾走し明々地を告ぐ劇齋怒り得

堪^くぞ^て。只^ひ管^さ罵^らの^の。亦^も見^まど^の。なる^る。され^ば湯^ゆ治^ち。藤^{ふじ}白^{しろ}の^の飛^と脚^{きゃく}を^をか
ち^ち追^お立^たく^て。獨^{ひとり}呵^か々^々と^とら笑^わひ。都^{みやこ}を^を窮^{きゆう}せ。時^{とき}劇^{げつ}齋^{さい}奴^ぬが^がつ^つま^まら^ら。
その返^へ報^{ほう}を^をけ^けこ^こま^まん^ん心^{こころ}地^ぢよ^よと^とら^ら。と^とひ^ひら^らと^とら^ら。誇^{あは}れ^れか^かて^て又^{また}湯^ゆ治^ち
後^ご妻^{さい}を^を娶^めんと^と。此^{こゝ}彼^{かれ}と^と相^あ譚^{だん}へ^へも。標^{めい}致^ちを^を擇^{えら}ぶ^ぶの^のも^もな^なら^らず。その^{その}賈^か財^{さい}を^を望^{のぞ}む^むの
少^{せう}さ^さぬ^ぬ。前^{ぜん}妻^{さい}の^の崇^{たか}む^む。風^{ふう}聞^{ぶん}か^かき^きあ^あな^なよ^よら^ら。婚^{こん}姻^{いん}と^とま^まく^く。整^{せい}正^{せい}と^と銀^{ぎん}の
寤^ね寐^み慰^いめ^めり^りて^て。近^{ちか}き^きと^とら^らの^の町^{まち}藝^ぎ子^こ水^{みづ}石^{いし}と^と呼^よぶ^ぶ。淫^{いん}婦^ぶ許^かが^がひ^ひを^を。扱^あけ^けの
水^{みづ}石^{いし}と^と女^{にょ}の^の父^{ちち}ハ^ハ佐^さ栗^り金^{ぎん}平^{へい}と^とい^いふ^ふ。破^{やぶ}落^{らく}戸^こあ^あら^らん^ん。定^{さだ}め^める^る。活^{かつ}業^{ぎやう}ハ^ハた^たく^く。只^ひ
賭^か変^{へん}と^との^の好^{この}み^み。又^{また}その^{その}母^{はは}ハ^ハ花^{はな}楠^{なん}と^と呼^よぶ^ぶ。と^と頑^{がん}固^こ。老^{らう}婆^ぱた^たり^り。と^とぞ^ぞれ
水^{みづ}石^{いし}の^の顔^{かほ}色^{いろ}。十^{じゅう}分^{ぶん}の^の趣^{しゆ}あ^あ。と^とま^まが^が為^なま^まお^おひ^ひを^を焦^こ。錢^{ぜに}と^と賣^うる^るの^の。考^{かんが}へ^へ

